【須田琴次先生古稀記念論文】

M. ICHIHARA, M.D.: ON THE FINDINGS OF NASAL
CAVITY OF ASTHMA BRONCHIALE

気管支喘息患者の鼻腔所見に就て

昭和医科大学耳鼻咽喉科学教室（主任 山本教授）

講 師 医学博士 市 原 正 雄
イチハラ マサオ

緒 言

アレルギーに関する研究は洋の東西を問わず数多
相見する所であるが、気管支喘息、荨麻疹、枯草
熱、クイケン氏浮腫、血管運動神経性鼻炎等はアレ
ルギー学説の隆盛なるに及び、之等は夫々独立せる
疾患と見做さず異なる身体部位に発生せる同一性疾
患と見做され、之等は総合的研究に向う傾向があ
る。

特に気管支喘息に関する研究は古来多々知見し、
其の数を挙げ得ざる程の状態である。

気管支喘息患者に屢々水様鼻汁、嚏、鼻閉即ち所
胃血管運動神経性鼻炎の症状を呈することは又、
古くより唱えられ、本邦に於いては石倉教授が「気
管支喘息患者の鼻腔所見について」詳細な報告を行
っているが、余も亦、気管支喘息患者の鼻所見を検
したので、茲に報告し、諸彦の御批判を乞わんとす
るものである。

実験材料並に実験成績

材料は昭和21年10月より昭和22年9月に至る
千葉大学中山外科入院患者100例である。

鼻汁検査は鼻鏡検査の下に適宜擤鼻、巻綿子、ツ
ベルクリン注射器にて粘膜面に接触することを避
け、オブジェクト硝子上に薄く摩擦しない様に塗抹
し、空中にて乾燥、固定するか或はメチールアルコ
ールで固定し、Pappenheim氏 May-Gimsa-Kom-
inerte Methode 或はメチレン青、ピロニン、
メチール、グリューン染色法を行つた。

実験成績

鼻内所見は第1表の如く

第 1 表

軽度発赤或は認めべき変化の無いもの	27例
蒼白浮腫状を呈するもの	42例
鼻茸様腫脹乃至鼻茸を認めるもの	16例
膿性鼻汁著明のもの	6例
萎縮性鼻炎の像を呈するもの	9例
計	100例

鼻の汁性状は第2表の通りで

第 2 表

漿液性	58例
粘液性	18例
漿液粘性	18例
膿性	6例
計	100例

血液、鼻汁の細胞学的所見を検索したものは自覚
症状として血管運動神経性鼻炎を合併した8例、合
併しない23例計31例であるが、鼻汁にエオジン嗜
好性細胞（以下 E と略す）を著明に認めたものは
第3表の通りである。

第 3 表

E (+)	26例 (83.9%)
E (-)	5例 (16.1%)

血中 E の出現の状態を觀ると第4表の如く

第 4 表

0～4%	7例 (22.2%)
5～9%	14例 (45.2%)
10～14%	6例 (19.4%)
15%以上	4例 (13.2%)
計	31例 (100%)

茲で鼻汁内 E 細胞を認めたもの 26 例と、認め

得ない5例の鼻汁の性状を観ると第5表の通りである。

第 5 表

E(+)	鼻汁	漿液性	19例(73%)	0例(0%)	E(-)
		粘液性	5例(19%)	0例(0%)	
		果粘性	2例(8%)	1例(20%)	
		膿性	0例(0%)	4例(80%)	
		計	26例(100%)	5例(100%)	

又、鼻汁内 E を認めたもの、認め得ないものゝ鼻内所見を観察すれば第6表の如く

第 6 表

E(+)	鼻粘膜	軽度発赤或は著変なし	1例(38%)	1例(20%)	E(-)
		蒼白浮腫状のもの	19例(73.1%)	0例(0%)	
		鼻茸様腫脹或は鼻息肉	6例(23.1%)	0例(0%)	
		膿性鼻汁著明なもの	0例(0%)	3例(60%)	
		萎縮性鼻炎の痕を呈すもの	0例(0%)	1例(20%)	
		計	26例(100%)	5例(100%)	

鼻汁内 E と鼻中 E との関係は第7表の通りである。

第 7 表

E(+)	血中E	0～4%	3例(11.5%)	2例(40%)	E(-)
		5～9%	13例(50%)	1例(20%)	
		10～14%	8例(30.8%)	1例(20%)	
		15%以上	2例(7.7%)	1例(20%)	
		計	26例(100%)	5例(100%)	

総括並に考按

1889年 F. Müller が喘息患者の血液及び喀痰中に E 増多あるを報告して以来諸氏の追試する所となつたが、

Leicher, Hansel は喘息、水様性鼻漏、過敏性鼻炎、鼻茸患者の鼻汁内及び局所粘膜内 E 増多は総て鼻アレルギーの診断上最も重要であるとし、Ball は喘息患者の9例の鼻腔及び副鼻腔の病理組織的研究を行い、浮腫あるもの7例、増殖性繊維組織炎3(2)例、ポリープ3例、単核細胞9例、腺増殖2例を挙げ、E. 9(8)例を認め、Fink, Hansel はアレルギー性鼻炎の鼻汁内及び鼻粘膜の E. 増加は本鼻疾患がアレルギー性疾患である論拠をなすものとし、Eyermann はアレルギー性鼻炎患者の鼻汁内 E 増多を検し、59例中無きもの16例(28.0%)を挙げている。

藤沢氏はアレルギー性鼻炎患者の鼻汁内 E. 増多は診断上重要な意義を有するを指摘し且つ実験的に海蜃に鼻粘膜の局所過敏症を発生せしめた。

又伊藤、上村氏は鼻汁内 E. 増加はアレルギー性鼻炎に特異的であるとし、高橋氏は鼻アレルギー患者72例中65例に E. 増多を認めている。

石倉教授は気管支喘息患者68名の鼻腔所見に就て、鼻内分泌物に就ては漿液性又は粘液性なるもの多く、鼻粘膜は浮腫性及び蒼白観を認め得るもの比較的多く、夫れ等の中明らかに血管運動神経性鼻炎と認むべきもの16例を見、鼻腔内分泌物に就てギムザ染色法による顕微鏡的検査を行い、42例(62%)に於て好酸球の出現を認めたが、其の出現度は鼻茸を有するもの、又は鼻粘膜の浮腫性若しくは蒼白観を示す症例に多く、鼻粘膜の変化乏しき症例に於ては殆んど其の出現を認めず、血液検査の結果27例(40%)に於て血液内好酸球4%以上の数値を認めたが、アレルギー関与率と思われる10%以上に及ぶものは12例(18%)であつた。とし、

又、鼻粘膜の浮腫性若しくは蒼白観と、血液の好酸球増多症との間には明かな関連性を認めず、鼻甲介にアドレナリンを塗布して其の収縮度を観察したが、其の収縮度と鼻内分泌物の好酸球出現度、若しくは血液の好酸球増多症との間には関連性を認めない。と報告している。

就つて余の成績を観ると、気管支喘息患者100例中、鼻内所見は蒼白浮腫状を呈するもの最も多く42例にして、石倉氏の成績と一致し、鼻内分泌物は漿液性58例で、最も多く次いで粘液性、漿粘性各13例にして、之又、同氏の成績に合致している。

鼻内分泌物に就ての余の成績は31例中、26例(83.9%)に E. 増多を認めたが、氏の成績は68例中42例(62%)に之を認め、血液検査の結果、4%以上に好酸球を認めたものは77.8%にして氏の40%より遙かに高率に見られ、10%以上のものは32.6%で、同氏の18%に比すれば同じく高率を示している。

次に鼻内分泌物中に E. を認めたもの26例の鼻汁、鼻粘膜の性状に就て見ると、鼻汁の性状は漿液性73%、粘液性19%で、鼻内所見は蒼白浮腫状73.1%にして最も多く、之は諸氏の成績と良く一致

ている。

鼻内分泌物中の E. と血中 E. との関係は鼻汁内 E. を認めたものゝ 26 例中 13 例 (50%) は 5~9% に血中 E. を見た。

又、気管支喘息発作前、中、後に観察した 3 例の成績よりすれば血中 E. 細胞出現は鼻汁中出现に先んじて出現しており、之は山中氏が幼弱海賓を用いてアレルギー性鼻炎の動物実験を行い、鼻腔組織内変化は血液に於ける変化と共に始り、其の組織内成分より見ても略々平行した曲線をなすが、流血中変化が常に一步先んじて現れる事を認め、血液像に依って鼻腔組織内の大要を窺知し得られるものゝ如しとしている。との実験と比較して興味がある。

之を要するに気導アレルギー性疾患の鼻汁及び喀痰中の顕微鏡的所見はアレルギー性疾患の確診になるとは云えないまでも診断上重要な一因子であるとされる。

結 論

1) 気管支喘息患者 100 例の鼻内所見は軽度発赤或は認むべき変化の無いもの 27 例、蒼白浮腫状を呈するもの 42 例、鼻茸様腫脹乃至鼻茸を認めたもの 15 例等であつた。

2) 鼻汁の性状は漿液性 58 例、粘液性及び漿、粘液性各 18 例、膿性 6 例であつた。

3) 鼻汁内 E. 細胞を認めたものは 26 例 (83.9%)、認めないもの 5 例 (16.1%) であつた。

4) 血中 E. は 0~4%, 7 例 (22.2%)。5~9%, 14 例 (45.2%)。10~14%, 6 例 (19.4%)。15% 以上, 1 例 (3.2%) であつた。

5) 鼻汁内 E. を認めた 26 例の鼻汁の性状は漿液性 19 例 (73%)、次いで粘液性、漿、粘液性、膿性の順で、E. を認めない 5 例中、膿性は 4 例 (80%) であつた。

6) 鼻汁中 E. を認めた 26 例の鼻内所見は蒼白浮腫状のもの 19 例 (73.1%)、鼻茸様腫脹乃至鼻茸を呈するもの 6 例 (23.1%) で、E. を認めない 5 例中 例 (60%) は膿性鼻汁著明のものであつた。

7) 鼻汁中 E. を認めた 26 例の血中 E. は 5~9% 3 例 (50%)、10~14% 8 例 (30.8%) にして、E. を認めない 5 例の血中 E. は 0~4% 2 例 (40%) で、

5~9%, 10~14%, 15% 以上は夫々 1 例 (20%) であつた。

8) 気管支喘息発作前、中、後に観察し得た 3 例の成績よりすれば血中 E. 出現は鼻汁中出现に先んじて出現していた。

9) 気道性アレルギー疾患の診断は鼻汁中の E. に依りアレルギー疾患であると確診する迄はいかないまでも診断上重要な一因子であると思考する。

文 献

- 1) Eyer mann: Ann. of O. R. L., 36, p. 808, 1927.
- 2) Hansel: J. A. M. A., Vol. 62, p. 15, 1924.
- 3) Hansel: J. Allergy, Vol. 1, p. 43, 1929.
- 4) Hansel: Ann. of Otology., Vol. 39, 1930.
- 5) Hansel: J. Allergy, Vol. 5, No. 4, p. 357, 1934.
- 6) Hansel: Ann. of O. R. L., 49, p. 54, p. 359, 1940.
- 7) 藤沢: 日耳鼻, 42 巻, 2 号, p. 216.
- 8) 藤沢: 日耳鼻, 42 巻, 2 号, p. 238.
- 9) 藤沢: 日耳鼻, 42 巻, 5 号, p. 645.
- 10) 市原: アレルギーと臨床 (文光堂).
- 11) 市原: 耳喉, 24 巻, 11 号, 512 頁.
- 12) 市原: 耳喉, 25 巻, 10 号, 609 頁.
- 13) 市原: 昭和医誌, 13 巻, 3 号, 1 頁.
- 14) 市原: 昭和医誌, 14 巻, 3 号, 8 頁.
- 15) 市原: 昭和医誌, 15 巻, 3 号, 4 頁.
- 16) 石倉: 日耳鼻, 58 巻, 2 号, 152 頁.
- 17) 高橋: 耳鼻臨床, 37 巻, 3 号, 235 頁.
- 18) 高橋: 耳鼻臨床, 37 巻, 4 号, 340 頁.
- 19) 分目: 日耳鼻, 38 巻, 7 号, 86 頁.
- 20) 分目: 日耳鼻, 38 巻, 8 号, 885 頁.
- 21) 山川: 日医事報, 1473 号, 2425 頁, (昭 27. 7. 19).

拙筆するに当り御校閲の勞を賜りたる恩師山本教授に深甚なる謝意を表すると共に、本研究の機会を当えられ、種々の御便宜を戴いた千葉大学中山教授並に鈴木 (次) 助教授 (現整形外科教授) に深謝の意を表する。

(本論文の要旨は日本耳鼻咽喉科学会第 333 回東京地方会に於て演述した)。

(原稿到着=昭和 30.11.22 日)